

3 人類が消えた街

いつの日にか自然が、コンクリートでできた途方もなく巨大ななにか、たとえば現代の都市を飲み込んでしまうなどという事態は、ちよつと想像がつかない。ニューヨーク・シティのとてつもない大きさを目の前にすると、それが朽ち果てる図を思い描こうという気は起きない。二〇〇一年九月の同時多発テロが示したのは、爆発物を持った人間になにができるかということにすぎなかった。浸蝕であれなんであれ、自然のプロセスを示したわけではないのだ。ワールド・トレード・センターのツインタワーがあつというまに崩壊して人びとが考えたのは、犯人のことであり、インフラ全体を破滅に導きかねない致命的な脆さのことではなかった。かつて想像すらできなかった大惨事の被害は、わずか数棟のビルに及んだだけだった。それでも、自然が都市社会の産物を捨て去るのにかかる時間は、私たちが考えるより短いかもしれない。



一九三九年、ニューヨークで万国博覧会が開催された。そこで展示するため、ポーランド政府はヴ

ワディスワフ・ヤギエウオの像を送った。ビヤウオヴィエジャ・プーシユチャの創設者であるヤギエウオが銅像として永遠の名声を得たのは、六世紀前に広大な原生林を保護したからではなかった。ポーランドの女王と結婚して、同国とみずからが統治するリトアニア大公国を統合し、ヨーロッパの大国にのしあげたからなのだ。銅像は、一四一〇年のグルンヴァルトの戦いに勝利して馬にまたがるヤギエウオの姿をかたどったもので、勝ち誇ったヤギエウオが、いましがた打ち破ったチュートン騎士団から奪った二本の剣を掲げている。

ところが、一九三九年の時点では、ポーランド人はチュートン騎士団の末裔に対して旗色が悪かった。ニューヨーク万博が終わる前にヒトラー率いるナチスがポーランドを占領したため、像は祖国に戻れなくなってしまった。悲しむべき六年間ののち、ポーランド政府は、暴虐を生き抜いた自国の勇者たちの象徴として、像をニューヨークに寄贈した。ヤギエウオの像はセントラル・パークに設置され、現在はタートル・ポンドと呼ばれる池を見下ろしている。

エリック・サンダーソン博士は、セントラル・パーク見学ツアーを引率する際、ツアー客とともにヤギエウオの像の前を素通りするのが普通である。全員が別の時代、つまり一七世紀に夢中になっているからだ。つば広のフェルト帽の下に眼鏡をかけ、白いものが混じりはじめたあごひげをきちんと整え、バックパックにノートパソコンを詰め込んで持ち歩くサンダーソンは、野生動物保護協会に所属する景観生態学者である。野生動物保護協会は、危機に瀕した世界を救おうとする研究者の世界的な団体だ。そのブロンクス動物園本部で、サンダーソンは「マナハッタ・プロジェクト」の指揮をとっている。このプロジェクトは、一六〇九年にヘンリー・ハドソン一行が初めて目にしたマンハッタン島を、バーチャルに再現しようという試みだ。都市になる前のマンハッタンの光景は、人類亡きあとの未来の様子について思索を誘うものである。

サンダーソンのチームはオランダ語の一次資料、植民地時代のイギリス軍の地図、地形測量図、街中に散らばる何世紀分ものさまざまな記録を渉獵した。堆積物を精査し、花粉の化石を分析し、細々した無数の生物学的データを画像化ソフトに打ち込んだ。このソフトが、鬱蒼とした原生林を大都会と並置した三次元のパノラマを作成してくれるのだ。ニューヨークの一部に繁殖していたことが確認された草木の種を入力するたび、画像はいっそう詳細に、衝撃的に、説得的になっていった。目標は、ニューヨークのブロックごとにこうした森の亡霊のガイドをつくることだ。不気味なことに、エリック・サンダーソンの目には、五番街を走る路線バスをよけるときのその亡霊が見えているらしい。

セントラル・パークを歩き回っているとき、サンダーソンには、三万八千二百〇〇立方メートルあまりの土が運び込まれる前の光景が見える。その土を運び込んだのは、公園の設計者であるフレデリック・ロー・オルムステッドとカルヴァート・ヴォークスで、ツタウルシやハゼノキに囲まれた湿地ばかりの土地を埋め立てるためだった。プラザ・ホテルの北、現在の五九丁目の通り沿いにあった細長い湖からは干満のある川が流れ出しており、塩性湿地を蛇行してイーストリバーへ注いでいた。西からは、湖に流れ込む二本の小川が見える。この川のおかげで、マンハッタンの長い稜線の斜面は水はけが良かった。シカやピューマの通り道だったこの稜線が、いまはブロードウェイになっている。

エリック・サンダーソンには、街のいたるところに水が流れているのが見える。そのほとんどは地下から湧き出したものだ。彼が確認しただけで、かつては丘陵が多く岩だらけだった島を流れていた小川は四〇本以上にのぼる。この島に最初に住みついたデラウェア族のアルゴンキン語で、マナハッタとは、現在ではなくなくなってしまったそれらの丘を指していた。一九世紀ニューヨークの都市設計家たちが、グリニッチヴィレッジから北の全域に格子状の道をつけた際——もともと南にあった入り組んだ通りのもつれを解くことはできなかった——彼らは地形などおかまいなしに事を運んだ。セントラ



2006年頃のマンハッタンと並置された1609年頃のマンハッタン。島の南端が拡張され、なにもなかった土地に建物が建ったことがわかる ©YANN ARTHUS-BERTRAND/CORBIS 野生動物保護協会マナハッタ・プロジェクトの依頼でマークレイ・ポイヤヤーが三次元に視覚化。

ル・パーク内と島の北端にある、動かすことのできない巨大な片岩の露頭を除いて、マンハッタンの起伏に富んだ土地は押し潰され、川床に捨てられ、それから平らにならされて、拡大する都市を迎え入れたのである。

その後、島の新しい輪郭線が、今度は直線のかつ鋭角的に形成された。一方、かつて島の土地を彫り刻んでいた水は、いまや格子状のパイプを通じて地下に追いやられていた。エリック・サンダーソンのマナハッタ・プロジェクトの画像からわかるのは、現代の下水道が昔の水路を大体なぞっているということである。もともと、人工の下水道は自然ほど効率的には排水できないのだが。川を埋め立ててしまった都市でも、「雨は依然として降ります。雨水はどこかに流れていかなければなりません」とサンダーソンは言う。

自然がマンハッタンを崩壊させようとする

れば、この点が堅牢なこの島につけ込むカギとなる。マンハッタンの急所を最初に一撃したら、崩壊はあつというまだ。その急所とは、地下である。

ニューヨーク市交通局の水害対策部長ポール・シューバーと水害緊急対策チーム第一級保安責任者ピーター・ブリファはともに、それがどういふことかを知り尽くしている。二人は毎日、ニューヨークの地下鉄のトンネルが約五〇〇万リットルの水に飲み込まれることのないよう、目を光らせていなければならない。

「すでに地下に溜まっている分だけで、その量です」とシューバーは言う。

「雨が降った場合、トータル水量は……」ブリファは、もう降参とでも言うように手のひらをこちらに向ける。「とても計算できません」

実際に計算できないことはないかもしれない。だが、街が建設される前とくらべ、降水量はいまでもまったく減っていない。かつてのマンハッタンでは、水の染み込みやすい約七〇平方キロの土地に植物の根が這いまわっており、それが平均年間降水量に当たる一二〇〇ミリの水を吸い上げ、湿地の草をうるおしていた。こうした草は水を十二分に吸収すると、残りは大気中に放出した。根が取り込めなかった分は、島の地下水面に流れ込んだ。ところどころで、この水が池や沼地に湧きだし、余分な水は四〇本の小川を通じて海へ排出された。これらの小川も、いまやコンクリートとアスファルトの下敷きになっている。

こんにちでは、雨水を吸収する土壌も発散させる植物もほとんどないし、ビルが日光をさえぎるため水は蒸発しない。それゆえ、雨は水たまりに溜まるか、重力にしたがって下水溝に流れ落ちるかだ。さもなれば地下鉄の通気孔に流れ込み、すでに溜まっている水をさらに増やすことになる。たとえば

一三一番ストリートとレノックス・アヴェニューの下では、水位を上げている地下河川のせいで、地下鉄のA、B、C、Dの各線の底部が腐蝕しつつある。シューバーとブリファをはじめ、反射ベストに洗いざらしのデニムの作業着という格好の男たちが絶えず地下に這い降りては、ニューヨークの地下では水位が上昇の一途をたどっているという事実と向き合っているのだ。

激しい雨が降ると必ず、豪雨に運ばれたゴミで下水溝が詰まってしまう。世界中の都市を漂うピニールのゴミ袋の教こそ、まさに計算不能かもしれない。水ははけ口を求めて最寄りの地下鉄の階段を流れ落ちる。そのうえ北東風でも吹こうものなら、大西洋の大波が押し寄せてニューヨークの地下水面に襲いかかる。ついには、ロワー・マンハッタンのウォーター・ストリートやブロンクスのヤンキー・スタジアムなどで、水がトンネル内にあふれてすべてを停止させる。水が引くまでそれらが復旧することはない。万が一、海水の温度が上がりつづけ、海面の上昇速度が一〇年に約二・五センチという現在のペースを上回ることにでもなれば、やがて水はまったく引かなくなるだろう。そのときまにが起こるかは、シューバーにもブリファにもわからない。

こうした諸々の事情に加え、一九三〇年代につくられた水道の本管はしょっちゅう破裂する。そう考えると、ニューヨークが洪水から守られてきたのは、ひとえに地下鉄職員による不断の監視と七五三基のポンプのおかげなのだ。これらのポンプについて考えてみよう。一九〇三年、エンジニアリングの粋を集めたニューヨークの地下鉄網は、急成長していた既存の都市の地下に建設された。すでに下水管が敷設されていたので、地下鉄はその下につくらざるをえなかった。「だから、ポンプで水を汲み上げる必要があるのです」と、シューバーは説明する。これはニューヨークだけの話ではない。ロンドン、モスクワ、ワシントンといった都市でも、地下鉄はかなり深い場所に建設された。防空壕を兼ねている場合も多い。そのため、大惨事が起こる可能性は大いにあるのだ。

白い安全ヘルメットで日差しから目を守りながら、シューバーはブルックリンのヴァン・シクレン・アヴェニュー駅の下にある四角い穴を覗き込む。一分間に二五〇〇リットル近い天然の地下水が岩盤から湧き出している。シューバーはごうごうと流れ落ちる水のほうに手を振り、四基の鑄鉄製水中ポンプを指し示した。これらのポンプが重力に逆らって交代で水を汲み上げ、水位を保っているのだ。ポンプは電気で動いているため、停電すると一気に大変なことになりかねない。ワールド・トレッド・セクターへのテロ攻撃のあととは、移動式の大型ディーゼル発電機を備えた緊急ポンプ列車が、シェイ・スタジアムの二七倍の容積の水を汲み出して急場をしのいだ。懸念されているように、ハドソン川の水がニューヨークとニュージャージーを地下で結ぶバス・トレインのトンネルに流れ込むようなことがあれば、ポンプ列車も、そしておそらくはニューヨーク・シティの大部分も水没してしまうだろう。

街から人間が消えれば、ポール・シューバーやピーター・ブリファのような人もいなくなる。つまり、降水量が五〇ミリを超えると——近頃は心配なほどそうなることが多い——水浸しになった駅から駅へ駆けまわり、あるときはホースを階段の上まで引きずり上げて通り沿いの下水溝に排水し、あるときは地下トンネルをゴムボートでこぎ進む者は、もういないのだ。人がいなくなれば、電気も来なくなる。ポンプは止まり、二度と動かない。「このポンプ施設が停止すると三〇分ほどで水位が上がって電車は通れなくなりです」と、シューバーは言う。

ブリファは安全メガネを外して目をこすった。「ある地区で洪水が起これば、ほかの地区にも水が押し寄せます。三六時間足らずで街全体が水浸しでしょう」

雨が降らなくても、地下鉄のポンプが止まればほんの数日でそうなるだろうと、二人は見ている。すると、水が舗装道路の下の土を流し去るようになる。まもなく、通りに穴が開きはじめる。下水道

はことごとく詰まり、地表に新しい水路が形成される。さらに別の水路が忽然と現われるのは、水浸しになった地下鉄の天井が崩れ落ちるときだ。二〇年もすれば、イーストサイドの地下鉄の四、五、六番線上を走る道路を支える水浸しの鉄柱が、腐蝕して崩壊する。レキシントン・アヴェニューが陥没すれば、川になるだろう。

しかし、そんな事態が訪れるだいぶ以前に、街中の舗装道路はすでに手の施しようのない状態になっているはずだ。ニューヨークのクーパー・ユニオン大学で土木工学部長を務めるジャミール・アーマド博士によれば、マンハッタンから人が消えて最初に巡ってくる三月に、あらゆるものが崩壊しはじめるという。毎年三月、気温は摂氏零度前後を四〇回くらい行ったり来たりするのが普通だ（気候が変わればこの時期は二月に早まるだろう）。すると凍結と融解が繰り返され、アスファルトやコンクリートにひびが入る。雪が溶けると、できたばかりの割れ目に水がしみ込む。その水が凍って膨張すると、割れ目が広がる。

あの壮大な都市景観の下に閉じ込められていた水の報復といったところだろう。自然界では、水以外のほとんどの化合物は凍ると収縮するのだが、水の分子は逆に膨張する。優美な六角形の結晶に姿を変えると、液体の状態で自由に動き回っていたときとくらべ、約九パーセント余分にスペースをとるのである。美しい六面体の結晶を見ると、雪片とはじつに繊細なものだという感じがする。そのため、それが歩道の分厚いコンクリート板をばらばらにしてしまうなどは、なかなか想像できない。まして一平方センチあたり五四〇キログラムの圧力に耐えるよう設計されている炭素鋼の水道管が、凍って破裂するとは信じられない。ところが、まさにそうということが起こるのである。

舗装道路にひびが入ると、カラシナ、シロツメクサ、ヤエムグラといった雑草がセントラル・パー

クからやってきて、新しい割れ目に沿って繁茂し、さらに割れ目を広げる。現在の世界では、手遅れになる前に市の保全係が現われて、雑草を引き抜き、亀裂を埋める。だが、人のいなくなった世界では、ニューヨークを絶えず修繕してくれる者は残っていない。雑草につづき、この街で最も繁殖力旺盛な外来種であるニワウルシの木が生えてくる。「神樹」という無垢な別名を持つニワウルシは、情け容赦のない侵略者だ。八〇〇万人もの住人がいるにもかかわらず、地下鉄のトンネルのわずかな裂け目に根を張り、広げた枝葉を歩道上の鉄格子からのぞかせるまで誰にも気づかれないのだ。若木を引き抜く者がいないため、五年もすれば、ニワウルシの強靱な根が歩道を持ち上げ、下水溝——すでに、誰も片付けないビニール袋やよれよれの古新聞であふれている——を破壊しているはずだ。舗装道路の下に長く閉じ込められていた土が太陽と雨にさらされると、ほかの種類の植物もやってきて、下水溝の鉄格子をふさいでいるゴミの山にあつというまに落ち葉が積もりはじめる。

初期の先駆者となる植物は、舗装道路にひびが入るのを待つ必要すらない。まず側溝に落ち葉や泥が溜まると、ニューヨークの不毛な甲殻の上に土の層が形成されはじめ、若木が芽を出すのだ。利用できる有機物がそれよりはるかに少ない状態——風で運ばれた塵と都会の煤だけ——であっても、まさにその通りのが起きている場所がある。マンハッタンのウエストサイドにあるニューヨーク・セントラル鉄道放棄された高架線路である。ここでは、一九八〇年に列車が運行を停止して以来、お決まりのニワウルシに加え、オニオングラスと白い毛に覆われたワタチヨロギという地被植物が密生し、アキノキリンソウが彩りを添えている。ところどころで、かつて列車が通っていた倉庫の二階から線路が姿を見せる。そこに、野生のクロッカス、アイリス、マツヨイグサ、アスター、ノラニンジンが生い茂っている。多くのニュー Yorker が、チェルシーの芸術地区にある建物の窓からその風景を見下ろし、このほったらかしにされた花咲く緑の帯に胸を打たれた。彼らは突如として預言者の

ように、街のなかのうち捨てられた部分への権利を主張した。こうして、その場所はハイラインというあだ名をつけられ、正式に公園に指定されたのである。

熱が失われて最初の数年で、街中のパイプが破裂し、凍結・融解サイクルが屋内に移行すると、事態は著しく悪化しはじめる。建物は内部構造が伸縮するたびにうめき声をあげる。壁と屋根の接合部分は分離する。そこから雨水が漏れ、ボルトが錆び、外装材がはがれ、断熱材がむき出しになる。ニューヨークがまだ焼けていないとしても、今度こそ焼けるだろう。ニューヨークの建物を全体として見れば、たとえばサンフランシスコに立ち並ぶ、下見板貼りのヴィクトリア朝様式の発火しやすい家々ほど燃えやすくない。しかし、通報に応じて駆けつけてくれる消防士がいなかったため、雨が降っていないときに雷が落ちると、セントラル・パークに一〇年間堆積した枯れ枝や枯れ葉に火がつき、炎は通りに広がっていく。二〇年もすれば、避雷針は錆びて折れはじめ、屋根についた火はあたりの建物に燃え移り、燃料となる紙でいっぱいのおフィスに入り込む。ガス管に引火し、燃えさかる炎が窓を吹き飛ばす。そこから雨や雪が吹き込むと、やがてコンクリートの床が凍っては溶け、ゆがみはじめる。焼けた断熱材と炭化した木材が、マンハッタンに増えつづける覆土層に養分を加える。在来種のアメリカツタとツタウルシが、地衣類に覆われた壁に根を食い込ませる。地衣類は大気汚染がないところに育つのだ。アカオノスリとハヤブサが、ますます骨組みを露わにする高層建築に巣をつくる。

ブルックリン植物園副園長のステイヴン・クレマンツは、二〇〇年足らずのうちに、先駆者となった雑草は移入してくる木々にはほ取って代わられると推測する。大量の落ち葉で埋め尽くされた側溝が新しい肥沃な土壌となり、街の公園から移ってきた在来種のオークやカエデが育つ。新参のハリエンジュやアキグミの灌木が窒素を固定してくれるおかげで、ヒマワリ、ウシクサ、マルバフジバカ

マが、リンゴの木とともにやってくる。これらの植物の種は、急増する鳥たちが排出したものだ。

クーパー・ユニオン大学土木工学部長のジャミール・アーマド博士は、生物の多様性はさらに拡大すると予測する。ビルが倒れてぶつかり合うと、砕けたコンクリートに含まれる石灰が土壌のpHを上げ、クロウメモドキやカバノキといった酸性度の低い環境を必要とする木が育つからだ。豊かな銀髪をして、表現力豊かに手を回しながら話すアーマドは、このプロセスは人びとが思うより早くはじまると考えている。彼はパキスタンのラホール——モザイクで飾られた歴史あるモスクの街——の出身で、現在はテロ攻撃に耐えられるよう建物を設計・改築する方法を教えており、構造物の脆弱性について造詣が深い。

「ニューヨークに立つほとんどの超高層ビルがそうですが、マンハッタンの堅い地盤にしつかりと固定してある建物であっても、鉄鋼の土台が水浸しになるとは想定されていません」と、彼は言う。詰まった下水溝、水があふれたトンネル、川に逆戻りした道路。こうしたものが重なって地下二階部分を破壊し、そこにかかる途方もない荷重を十分には支えきれなくしてしまうという。将来、いつそう強力になったハリケーンがさらに頻繁に北米の大西洋沿岸を襲うようになれば、ぐらぐらの高層建築にすさまじい風が打ちつけるだろう。一部の建物は倒れ、ほかの建物を破壊する。森で巨木が倒れた際にできる空地と同じように、新しい植物がその場所にどっと押し寄せる。こうして徐々に、アスファルト・ジャングルは本物のジャングルに姿を変えていくはずだ。



ニューヨーク植物園は、ブロンクス動物園の向かいの一平方キロあまりの敷地にあり、ヨーロッパ

を除く地域では世界最大の植物標本集を保有している。秘蔵品のなかには、キャプテン・クックが一七六九年の太平洋航海で集めた野草の標本や、チャールズ・ダーウインが採取して、黒の水性インクで記述・署名したメモをつけたティエラ・デル・フエゴ諸島のコケの断片などがある。だが最も注目すべきなのは、一六万二〇〇〇平方メートルほどの土地である。ここは在来種が手つかずのまま残る原生林だ。

一度も伐採されていないとはいえず、様子はすっかり変わった。つい最近まで、あの優美な針葉樹の鬱蒼とした木立を念頭に「アメリカツガの森」と呼ばれていたが、アメリカツガはほぼ全滅した。この文の最後に打ってある句点より小さな日本の虫にやられたのだ。その虫がニューヨークにやってきたのは、一九八〇年代半ばのことだった。この森がまだイギリス領だった当時から存在する最古にして最大のオークも、倒壊しつつある。酸性雨と重金属のせいで、生命力を奪われてしまったからだ。こうした重金属には、たとえば自動車や工場の煤煙に含まれる鉛などがあり、それが土壤に染み込んでいるのである。これらの木々が再び生えてくることは、まずないだろう。この森の樹冠木の大半は、だいぶ前から再生しなくなっているからだ。森に生えている在来種はいまや、ことごとく病原体にとりつかれている。菌類、昆虫、病気などが、化学物質の猛襲で弱った木々を征服する好機に乗じているのだ。これでもまだ足りないのか、広大な灰色の都会に囲まれた緑の島と化したニューヨーク植物園の森は、ブロンクスのリスにとって格好の避難所となってしまった。天敵がいなくなり、狩猟も認められていないため、リスはなににも邪魔されず発芽前のドングリヤヒッコリーの実をむさぼり食える。リスがやっているのは、そういうことなのだ。

この古い森の低木層には、いまや八〇年の空白がある。主に育っているのは、在来種であるオーク、カエデ、トネリコ、カバノキ、スズカケノキ、ユリノキの新しい世代ではなく、ブロンクスのあちこ

ちから飛んできた観賞用輸入植物なのだ。土壌のサンプルを調べると、二〇〇〇万個ものニワウルシの種がこの森で芽吹いていることがわかる。ニューヨーク植物園経済植物学研究所のチャック・ピータース所長によれば、いずれも中国原産のニワウルシやキハダといった外来種が、いまではこの森の四分の一以上を占めているという。

「森を二〇〇年前の状態に戻したがる人もいます」と、彼は言う。「そういう人にはこうお話しするのです。そのためには、ブロンクスを二〇〇年前の状態に戻す必要がありますよ、とね」

人間は世界中どこへでも移動できるようになると、生物を持って行ったり、持って帰ったりするようになった。アメリカ大陸の植物はヨーロッパ諸国の生態系を変えただけでなく、それらの国のアイデンティティ自体を変えてしまった。ジャガイモが入る前のアイルランドやトマトが入る前のイタリアを考えてみるといい。反対に、旧世界からの侵略者は、征服した新しい土地の不運な女たちに暴力を振るっただけでなく、コムギ、オオムギ、ライムギをはじめとするほかの植物の種をもばらまいた。アメリカの地理学者アルフレッド・クロスビーの言葉を借りれば、この生態学的帝国主義のおかげで、ヨーロッパの征服者は植民地にみずからの姿を永遠に刻んだのである。

その帰結のなかには馬鹿馬鹿しいものもあった。たとえば、ヒヤシンスとラッパズイセンが咲き乱れるイギリス庭園。これらの植物は、植民地インドにはまったく根づかなかったものだ。ニューヨークにホシムクドリ——いまやアラスカからメキシコまでの至る所で見られる害鳥——が移入されたのは、誰かがこんなふうに考えたからだ。シェイクスピアの作品に出てくる鳥がセントラル・パークに勢揃いすれば、ニューヨークはいっそう文化的になるはずだと。つづいて、彼の戯曲に登場するありとあらゆる植物をセントラル・パークの庭に植えようということになった。こうして、イチゲサクラソウ、ニガヨモギ、ヒエンソウ、エグランティンバラ、キバナノクリンザクラといった、叙情を

誘う草花の種が蒔かれた。足りないのは『マクベス』に出てくるバーナムの森くらいだったのである。マナハッタ・プロジェクトのバーチャルに復元された過去が、将来のマンハッタンの森にどれだけ似るかは、北米の土壌の支配権をめぐる戦いにかかっている。この戦いは、その原因をつくった人間がいなくなったあとでも長くつづくだろう。ニューヨーク植物園の標本集には、一見可憐な薄紫色の茎のアメリカで最初の標本が含まれている。この植物、すなわちエゾミノハギは、イギリスからフィンランドにかけての北海の河口域を原産とする。商船が大西洋を横断する際、ヨーロッパの干潟からバラストとして採取した濡れた砂に混ざって、その種が運ばれてきたらしい。植民地との交易が盛んになるにつれ、アメリカの海岸に放り出されるエゾミノハギの種も増えた。商船は荷物を積む前にバラストを捨てるからだ。いったん定着すると、エゾミノハギは河川をさかのぼっていった。泥だらけの鳥の羽や獣の毛に種が触れると、くっつくからである。ハドソン川の湿地帯では、水鳥やマスカラットの食糧であり隠れ家でもあったガマ、ヤナギ、クサヨシの群落が、紫色のカーテンのように密生したエゾミノハギに取って代わられ、野生動物でさえ入り込めなくなってしまう。二一世紀には、アラスカにまでエゾミノハギがはびこってしまった。同州の生態学者はうるたえ、いずれその植物が湿地全体を覆い、カモ、ガン、アジサシ、ハクチョウを追い出してしまおうのではないかと心配している。

シエークスピア庭園以前にも、セントラル・パークを設計したオルムステッドとヴォークスが、三八万二〇〇〇立方メートルあまりの盛り土とともに五〇万本の樹木を持ち込んでいた。彼らなりの先進的自然観を実現しようと、ペルシアの鉄樹、アジアのカツラ、レバノンスギ、中国のキリヤイチョウといった外来種を植えてマンハッタンの島に趣を添えたのだ。しかし、人間がいなくなれば、外来種の手強い派遣団と競い合って生得権を取り戻そうと居残っている在来種に地の利があるだろう。

八重のバラのような外国産観賞用植物の多くは、それを移入した文明が衰えれば一緒に消滅してしまふ。そうした植物は実のならない交配種であり、繁殖するには挿し木をする必要があるからだ。クローンをつくる庭師がいなくなれば、その植物も減びてしまふ。セイヨウキツタのような過保護に育てられたその他の移入種は、独力で生きていかねばなくなると、アメリカツタやツタウルシといったアメリカの無骨ないところたちに敗れ去る。

さらに別の植物として、じつは突然変異種がある。高度な品種改良によって無理矢理つくりだされたものだ。仮にこうした植物が生き延びたとしても、姿は変わり果て、数も減っていくだろう。世話をする者のいない果物、たとえばリンゴは、見栄えや味ではなく耐寒性を優先するため、ごつごつした形になる。ちなみに、リンゴはロシアやカザフスタンから入ってきたもので、ジョニー・アップルシードがその種を配って歩いたという伝説は誤りである。農薬を散布されていないリンゴ園は、アメリカ土着の厄介者であるリンゴミバエや葉もぐり虫といった害虫に抵抗する術を持たないため、一部がわずかに残るだけで、自生する広葉樹に土地を明け渡すことになる。外国から持ち込まれた菜園の野菜は、もとのみすばらしい姿に逆戻りする。ニューヨーク植物園のデニス・ステイヴンソン副園長によれば、アジア原産の甘いニンジン¹は、あつというまに野生のまじいノラニンジンに取って代わられるという。人間が植えたオレンジ色のおいしいニンジン²は、動物に食い尽くされてしまうからだ。ブロッコリー、キャベツ、芽キャベツ、カリフラワーは、そうは見えない共通のブロッコリーの先祖へと退化する。ワシントン・ハイツ・パークウェイの中央分離帯にドミニカ人が植えた種トウモロコシの子孫は、DNAをさかのぼり、ついにはメキシコ産の原種であるブタモロコシに戻ってしまうかもしれない。ブタモロコシの穂軸は、小麦の茎くらいしかないのだ。

自生植物に唐突に近づいてきた別の侵入者、すなわち鉛、水銀、カドミウムなどの金属は、すぐには土壤から洗い流せない。重金属という名の通り、分子が重いからだ。一つ確かなのは、自動車が大遠に止まり、工場の電気が消えて二度とつかなければ、この種の金属はこれ以上排出されないということである。もっとも最初の一〇〇年ほどは、石油タンク、化学工場、発電所、たくさんのクリーニング店に残された時限爆弾が、腐蝕によって定期的に爆発するだろう。燃料、洗濯溶剤、潤滑油などの残りをバクテリアが食べ、より無害な炭化水素に徐々に分解していく。とはいえ、一部の殺虫剤から可塑性や断熱材にいたる、人間が発明したありとあらゆる新製品は、微生物がそれを処理できるよう進化するまで何千年も残ることだろう。

それでも、酸を含まない雨が降るたびに、まだ持ちこたえている木々の敵である汚染物質は減っていく。化学物質が生態系から徐々に洗い流されていくからだ。何世紀ものあいだに、植物が取り込む重金属のレベルは低下していき、取り込まれた重金属は、再び循環・沈澱し、さらに希薄になっていく。植物が枯れ、腐り、表土が増えると、工業毒はさらに深い場所へと葬られる。そのため、在来種の若木の群落が代を重ねるたびに状態は良くなっていく。

昔からニューヨークに自生していた木の多くが、現に滅びつつあるわけではないとしても、絶滅の危機に瀕している。とはいえ、すでに絶滅した種はほとんどない。一九〇〇年頃に、アジアからの苗木の輸送船に乗ってニューヨークに胴枯れ病が入り込むと、アメリカ各地で大変な被害に遭った。その木が見られなくなってしまうことを、人びとは深く嘆いている。ところがそのアメリカカグリでさえ、ニューヨーク植物園の古い森に依然としてしがみついているのだ——文字通り根によって倒れるというサイクルを繰り返している。その活力を吸い取っている人間からのストレスがなくなれ

ば、病気に強い品種がいつか現われるかもしれない。かつて、アメリカグリはアメリカ東部の森林で最も高い広葉樹だった。それが復活すれば、この地に居座っているはずの強靱な外来種と共存せざるをえないだろう。そうした外来種には、メギ、ツルウメモドキ、そして間違いなくニワウルシが含まれる。こうした生態系は私たちがいなくなっても存続する人工の産物であり、私たちがいなければ決して出現しなかった国際的な植物混成体なのである。

それもまんざら悪くはないかもしれないというのが、ニューヨーク植物園のチャック・ピータースの見方だ。「現在のニューヨークをすばらしい都市にしているのは、その文化的多様性です。あらゆる人がなにかしら提供できるものを持っています。ところが植物の話となると、私たちは外来者恐怖症にかかってしまいます。在来種を愛し、侵略的な外来植物はとっとと故郷に帰ってもらいたいと望むのです」

彼はランニングシューズを履いた片足を、キハダの白っぽい樹皮にかけた。キハダは最後に残ったアメリカツガに囲まれて育っている。「こう言うとはちあたりに聞こえるかもしれませんが、生物の多様性を維持することは、機能する生態系を維持することにくらべれば大した問題ではありません。大切なのは、土壌が守られ、水が浄化され、木々が大気を濾過し、林冠が若木を再生させて栄養分がブロンクス川に流れ出さないようなことです」

彼は濾過されたブロンクスの空気を肺いっぱい吸い込んだ。五〇代前半ながらスリムで若々しいピータースは、人生の大半を森で過ごしてきた。彼の野外調査で明らかになったのは、アマゾン奥地で野生のパームナッツ、未開のボルネオ島でドリアン、ミャンマーのジャングルでギョリユウバイが群生しているのは、偶然ではないということだった。かつて、そこにも人間が住んでいたのである。荒野が人間とその記憶を飲み込んでしまったものの、現在の様子が人間の痕跡を伝えている。このブ

ロンクスLongksの森も同じことだろう。

実際、人類がこの地に現われて間もない頃から、この森にはその痕跡が刻まれてきたのだ。エリック・サンダーソンのマナハッタ・プロジェクトが再現しているのは、オランダ人が発見した当時の島であり、人跡未踏のマンハッタンの原生林ではない。そんなものは存在しなかったからだ。「デラウェア族がやって来る前、ここには厚さ一・六キロメートルの氷の板しかなかったのです」と、サンダーソンは説明する。

約一万一〇〇〇年前、最後の氷河期がマンハッタンの北へ後退すると、トウヒとアメリカカラマツのタイガ「ユーラシア、北米大陸に広がる針葉樹林」もその後を追いついて、現在はカナダ・ツンドラのすぐ南に広がっている。空いた土地には、私たちが知る北米の東部温帯林が形成された。すなわち、オーク、ヒッコリー、クリ、クルミ、アメリカカツガ、ニレ、ブナ、サトウカエデ、モミジバフウ、サツサfras、ハシバミなどからなる森である。森のなかの空き土地には、チヨークチェリー、ニオイウルシ、ロードデンドロン、スイカズラといった低木や、さまざまなシダ類と顕花植物が育った。塩性湿地にはスパルティナとアメリカカフヨウが現われた。これらすべての植物が、温暖化でできた生態的地位の隙間を埋めると、つづいて人間を含む恒温動物が登場した。

考古学的な遺物があまり残っていないことから考えて、最初のニューヨーカーたちは居を定めず、季節ごとに野営してはベリー類、クリ、野生のブドウなどをとっていたのだろう。シチメンチョウ、ヒースライチョウ、カモ、オジロジカなどを狩りもしたが、主に漁をしていたようだ。周囲の海には、キウリウオ、シャッド、ニシンがあふれていた。マンハッタンの小川にはカワマスが泳いでいた。カキ、ハマグリ、ホンビノスガイ、カニ、ロプスターはいくらでもいたので、苦もなくとれた。沿岸沿いに点在する大きな貝塚は、人間がこの地につくったはじめての構築物である。ヘンリー・ハドソン

がこの島を最初に目にした頃には、ハーレム北部とグリニッチヴィレッジは草深いサバンナで、デラウェア族が繰り返し焼き払っては作物を植えていた。マナハッタ・プロジェクトに携わる研究者たちは、古代のハーレムの炉を水浸しにしてなかが浮かんでくるかを見てみた。すると、デラウェア族がトウモロコシ、豆、カボチャ、ヒマワリを栽培していたことがわかった。それでも、マンハッタン島の大部分は、ポーランドのビャウオヴィエジャ・プーシユチャのような深い緑に覆われていた。だが、六〇オランダギルダで売却されて、原住民の土地から植民地の不動産へと、かの有名な変貌を遂げずいぶん前から、人類の印はすでにマンハッタン島に刻まれていたのである。



千年期の区切りとなる二〇〇〇年のこと、未来には過去が復活するのかもしれないと予感させるものが、こんな形で現われた。一匹のコヨーテがセントラル・パークにやってきたのである。その後、さらに二匹のコヨーテと、一羽の野生のシチメンチョウがマンハッタンに姿を見せた。人間がいなくなるのを待つまでもなく、ニューヨーク・シテイは野生に戻ってしまうのかもしれない。

最初に偵察にきたそのコヨーテは、ジョージ・ワシントン橋を渡ってやってきた。ニューヨーク・ニュージャージー港湾管理委員会からの委託でこの橋を管理していたのは、ジェリー・デル・トウフォという人物だった。彼はその後、スタテン島とマンハッタン島やロングアイランドを結ぶ橋の管理を引き受けた。四〇代の構造技術者であるデル・トウフォは、橋というのは人間が考え出した最も美しいアイデアの一つだと思っている。大きな裂け目に優雅なアーチをかけ、人びとを結びつけるのだから。

デル・トゥフォ自身、大洋をまたぐ架け橋である。黄褐色の顔は、イタリアはシチリア島の出身であることを物語っているが、口を開けばまるつきりニュージャージーの都市部の話し方なのだ。舗装道路と鉄鋼に囲まれて育ち、やがてその二つを生涯の仕事とした彼でさえ、次のような現実には驚きを禁じえない。ジョージ・ワシントン橋の塔のてっぺんで毎年ハヤブサのヒナが孵る奇跡。地面から遠く離れた、海上につるされた鉄の窪みにふてぶてしく繁茂する雑草やニワウルシのたくましさ。彼の管理する橋は、自然からのゲリラ攻撃に絶えずさらされている。その兵器や軍勢は、鋼板の鎧よろい甲かざを前にしては馬鹿馬鹿しいほど貧弱に思えるかもしれない。ところが、あらゆる場所に延々と降りつづく鳥の糞を放っておけば、致命的な被害をこうむることになる。鳥の糞は、空中を漂っている植物の種を捕らえて芽吹かせると同時に、ペンキを溶かしてしまうからだ。デル・トゥフォが戦っているのは、原始的だがひるむことのない敵である。その究極の強みは、相手より長く残るといふ能力なのだ。デル・トゥフォは、最後には自然が勝つという事実を認めている。

とはいえ、彼が目を光らせているあいだは、そうはさせない。なんと言っても、自分と仲間が受け継いだ遺産に敬意を払っているからだ。彼らが管理している橋は、一日に三〇万台もの車が行き来するとは夢にも思わなかった世代のエンジニアによって建造されたものだ。八〇年後の現在、橋はまだ現役である。デル・トゥフォは仲間たちに語る。「われわれの仕事はこの宝物を受け継いだときよりいい状態にして、次の世代に引き渡すことなんだ」

ある二月の午後、にわかに降り出した雪のなか、デル・トゥフォは無線で仲間と話しながらベイヨン橋に向かった。スタテン島側の橋の入り口の下面は、強力な鋼鉄の基盤である。これを一手に受け止めているのが、岩盤に固定された巨大なコンクリート・ブロック、つまりベイヨン橋の荷重の半分を支える橋台である。荷重を支える入り組んだI形桁と筋交い材を連結するのは、厚さ一センチあま

りの鋼板、フランジ、数百万本に及ぶ一センチ超のリベットとボルトである。こうした様子をまっすぐに見上げると、ヴァチカンにそびえるサンピエトロ大聖堂の丸天井に見とれ、圧倒されるような畏怖の念に打たれて謙虚になる巡礼者の気持ちかわかる。こんなすばらしいものが永遠にここに残るのだ。しかし、こうした橋は人間が守ってやらなければ崩れ落ちてしまうことを、ジェリー・デル・トウフォは百も承知しているのだ。

とはいえ、すぐに崩れ落ちることはない。差し迫った脅威は私たちとともに消滅するからだ。デル・トウフォによれば、それはひっきりなしに衝撃を加える車の往来ではないという。

「この手の橋は必要以上に頑丈にできているので、行き来する車など象に乗った蟻のようなものです」一九三〇年代には、建材の耐久性を正確に測定できるコンピュータがなかったから、エンジニアは用心のため、とにかくやりすぎるところまでやったのである。「私たちは先祖が残してくれた過剰設備で食いつないでいるのです。ジョージ・ワシントン橋だけでも、太さ約七・五センチの主ケーブル内の亜鉛メッキ鋼線は、地球を優に四周する長さがあります。たとえほかの吊索がすべて劣化しても、橋は落ちません」

最大の敵は、ハイウェイ局が毎年冬になると撒く塩だ。この貪欲な物質は、氷を溶かし尽くすと、次は鉄鋼を蝕みつづける。油、不凍液、車から垂れる雪溶け水などで塩が流され、集水溝や道の裂け目に入り込むと、保守作業員はそれを見つけて洗い流さなければならぬ。人間がいなくなれば、塩も撒かれない。とはいえ、さびは出るだろう。しかも相当に。なにしろ、橋を塗り直す人間はいないのだから。

最初は、酸化によって鋼板にコーティングが施される。その厚さは鋼板自体の倍以上あるため、化学物質の攻撃を遅らせることになる。鋼鉄がすっかり錆びて粉々になるまでには、何百年もかかるか

もしれない。だが、ニューヨークの橋が落下しはじめるのは、それほど先のことではない。凍結・融解のドラマが金属でも起こるからだ。鋼鉄の場合、コンクリートのようにひび割れるわけではなく、温まると膨張し、冷えると収縮する。このため、夏になって鉄橋が伸びても大丈夫なように、膨張目地が設けてある。

冬に鉄橋が縮むと、膨張目地内のスペースが広がり、風で飛んできたいろいろなものが入り込む。こうなると、気温が上がったときに橋が膨張する余裕が減ってしまう。橋を塗装する人間がいいため、膨張目地にはゴミだけでなくさびも詰まる。こうしたものがたまっていき、やがて、その場所に入るべき金属よりはるかに広いスペースをふさいでしまう。

「夏になると、好むと好まざるとにかかわらず、橋の体積は大きくなります。膨張目地が詰まれば、橋は一番弱い継ぎ目に向かって伸びていきます。二種類の異なる素材がつながれている部分などです」と、デル・トゥフォは言う。彼は、鋼鉄製の四車線道路がコンクリートの橋台とぶつかる場所を指さす。「たとえば、あそこです。コンクリートは、橋桁が橋脚にボルトで固定されている場所からひび割れます。あるいは、何度か季節がめぐるとボルトがねじ切れることもあります。最終的に、橋桁は少しずつ動いてはずれ、落ちてしまうのです」

接続部はことごとく脆いものである。デル・トゥフォによれば、ボルトで固定された二枚の鋼板のあいだに生じるさびの猛威はすさまじく、鋼板がゆがんだりリベットが飛び出したりするという。ベイヨン橋やヘルゲート橋（イーストリバーに架かる鉄道橋）のようなアーチ橋は、最も余裕を持たせた設計になっている。こうした橋は、向こう一〇〇〇年は大丈夫かもしれない。もともと、海岸平野の下に横たわる断層の一つを地震がさざ波のように伝わってくれば、その寿命が縮むことも考えられる。（イーストリバーの下を通る、鉄で内張りされたコンクリートでできた一四本の地下鉄トンネル

——そのうちブルックリンに通じる一本は馬車の時代につくられたものだ——よりは長持ちするはずだ。トンネルの一部でもはがれれば、大西洋の水が流れ込んでくるからである。一方、自動車を通る吊り橋やトラス橋は、二、三〇〇年もすればリベットやボルトがはずれ、下で待ちかまえている水面に橋全体が落下するだろう。

そのときまでは、セントラル・パークにたどりついたあの勇敢なコヨーテの足跡を追って、さらに多くのコヨーテがやってくる。カナダからニューイングランド地方に戻っていたシカ、クマ、最後にはオオカミまでが、次々に現われる。橋の大半が崩落する頃には、マンハッタンの比較的新しい建物も倒壊しているだろう。漏れた水が建物に埋め込まれた鉄筋にまで達すると、鉄筋が錆びて膨張し、周囲を覆うコンクリートを破裂させるからである。グラランド・セントラル駅のような古い石造りの建物は、大理石をあばたにする酸性雨が降らなくなるおかげで、ピカピカの現代的なビルのとれよりも長持ちするはずである。

廃墟となった高層ビル群には、マンハッタンに再形成された小川で育つかエルの愛の歌がこだまする。そうした川にはいまやエルワイフが泳ぎ、カモメが落としたイガイが潜んでいる。ハドソン川にはニシンやシャッドが戻ってきた。もともとこれらの生き物は、インディアン・ポイント原子力発電所の鉄筋コンクリートの建物が倒壊したあと、数世代をかけてそこから漏れてくる放射能に適應したのだ。この発電所はタイムズ・スクエアから北へ五五キロほどの場所にある。しかし、私たちの世界に順応した動物はほとんど見あたらない。無敵に思える熱帯産のゴキブリは、暖房が切れたアパートでずいぶん前に凍りついてしまった。生ゴミが出ないので、ネズミは餓死したり、超高層ビルの残骸に巣をつくった猛禽の餌食となったりした。

水位の上昇、潮の干満、塩による腐蝕のせいで、ニューヨークの五つの行政区を取り巻く人工の海岸線は、入り江と小さな浜に姿を変えている。セントラル・パークの池や貯水場は、浚渫しゅんせつされないため湿地に生まれ変わった。野生の草食動物がいないので——二輪馬車ハンサムや公園の警察官に利用されていた馬が野生化して繁殖しないかぎり——セントラル・パークの草地は消えてなくなる。成熟した森は本来の姿を取り戻し、放射状に広がってかつての通りを覆うと、無人の建物の土台に侵入する。コヨーテ、オオカミ、アカギツネ、アカオオヤマネコがリスを適度な数に戻すおかげで、オークは丈夫になり、人間が堆積させた鉛よりも長く地上に残る。五〇〇年後には、たとえ気候の温暖化が進んでいても、オークやブナのほか、トネリコのような湿気を好む種が繁茂しているはずだ。

とつきの昔に、野生の肉食動物が飼い犬の最後の子孫を片付けているが、野生化した狡猾な飼い猫は生き残り、ホシムクドリを餌にしている。とうとう橋が崩落し、トンネルに水があふれ、マンハッタンが本当の意味で島に戻ると、ヘラジカとクマが広くなったハーレム川を泳いで渡ってくる。かつてデラウェア族が摘んだベリー類をたらふく食べるためだ。

文字通り永久に崩壊したマンハッタンの金融機関の瓦礫のなかに、銀行の金庫室がいくつかつぶれずに残っている。そこにしまわれているお金は、もはや価値がないとはいえ、カビは生えているが無事である。美術館の保管庫に入っている美術品はそうはいかない。こうした保管庫は、強度よりも温度調節を重視してつくられている。電気が来なければ保護機能も働かない。いずれは美術館の屋根にひびが入って水が漏るようになる。たいてい天窓から漏りはじめ、地階はたまった水でいっぱいになる。湿度と温度の激しい変動にさらされ、保管庫に入っているあらゆるものが、カビ、バクテリア、ヒメカツオブシムシ（美術館の悪名高い疫病神）の食欲な幼虫の餌食になる。これらが別の階に広がると、メトロポリタン美術館の絵画は菌類によって色褪せたり溶解したりして、見る影もなくなつて

しまう。一方で陶磁器類が無事なのは、化学的性質が化石と似ているからだ。なにかが上に落ちないかぎり、陶磁器類は再び埋まって次世代の考古学者に発掘してもらうのを待つ。腐蝕によってブロンズ像の緑青は濃くなるが、形には影響しない。「だからこそ、私たちは青銅器時代のことがかかるのです」と、マンハッタンの美術館員であるバーバラ・アベルバウムは言う。

アベルバウムによれば、自由の女神がやがて港の底に沈んだとしても、多少の化学的変化があったり、フジツボだらけになったりするかもしれないが、その形はいつまでも保たれるという。女神にとってはそこが一番安全な場所かもしれない。というのも、今後数千年のうちに、まだ残っている石壁もついには一つ残らず倒壊するはずだからだ。それはもしかすると、ワールド・トレード・センターの向かいにある、セント・ポール礼拝堂の堅固な壁かもしれない。この礼拝堂はマンハッタンでとれた硬い片岩を使って一七六六年に建てられたものである。過去一〇万年のあいだに三度、氷河がニューヨークを根こそぎにしている。人類が炭素燃料に魂を売ったせいで大気の状態が取り返しのつかないほど悪化し、天井知らずの地球温暖化によって地球が金星に変貌してしまわないかぎり、いつの日か氷河は同じことを繰り返すはずだ。ブナ、オーク、トネリコ、ニワウルシが生い茂る成熟した森は、なぎ倒されるだろう。スタテン島のフレッシュユ・キルズ埋立場にそびえる四つの巨大なゴミの山は、べしゃんこになり、そこに積み上げられた途方もない量の強靱なポリ塩化ビニルと、人間の創造物のなかでも指折りの永続性を持つガラスは、粉々にすりつぶされる。

氷河が後退したあとで、不自然に密集した赤茶けた金属が、まずはモレーン「氷河によって運ばれた砂や岩からなる堆積物」に覆われ、やがて地層の下に埋もれていく。この金属は、一時は電線や配管の形をしていたものだ。その後ゴミ捨て場に運ばれ、大地に還っていった。道具をつくる者が次にこの地球にやってきたり進化したりすれば、こうした金属を見つけて利用するかもしれない。だがそのと

きには、それをその場所に置いたのが私たちだと示すものは、なに一つないだろう。